
とある白井黒子の兄

葛根

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある白井黒子の兄

【Nコード】

N3935Z

【作者名】

葛根

【あらすじ】

白井黒子の兄。

そいつが引き起こす話。

微エロ、TSなど注意が必要。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

プロローグ（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

ブローグ

●

白井黒子には兄がいる。

しらいこうた
白井紅太だ。

両親の頭を疑う。

兄、白井紅太は両親の名前の付け方に思う所があった。

白赤、白黒。苗字の頭と、名前の頭を合わせるとあら不思議。

ギャグか？

赤黒兄妹である。

白も含めると三色だ。

それがどうした。

俺の妹がこんなに可愛いわけがないの時期を通り過ぎ呼び方がお兄ちゃんからお兄様になっちゃった。

小5までは一緒に風呂に入ってくれたのに。

常盤台中学に入ったのが間違いであつたか。

奴はお嬢様ではない。

俺の妹だ。

超ラブリーである。

貧乳だけど。

レベル4になった時はちゃんとメールと電話くれた。

嬉しかったが追いつかれてしまった。

兄的に先んじていたモノが減るのは威厳が減るのと同じである。

まあ、まだ喧嘩では負けない気にいるし、実際兄妹喧嘩しても勝利した。

喧嘩といっても試合のようなもので、殺し合いではない。

こっちはボクシンググローブ付きで手加減してる。

何しろ妹を傷つけるなど兄のすることではない。

ジャッジメント
とはいえ、風紀委員になんぞ入ってしまったので、可愛い妹に傷が付かないように鍛えるという意味でよく喧嘩する。
喧嘩のあとは風呂だ。

レディーファーストで譲って覗くといつも、

『お兄様。死ね、ですの』

レベル4の空間移動テレポートで飛ばされる。

もしくは、石鹸かなんかが飛んでくる。

高校に入学した俺に対して扱い酷くね？

中学一年の妹に欲情しないわけないじゃない。

それでも俺の住んでいる第7学区の男子学生寮に来てくれるからその気がないわけでもあるまい。

家族だから宿泊許可じゃないし。

逆に常盤台中学の寮は家族でも許可などでないらしい。

まあ、宿泊はできなくても部屋に入る位は出来るらしい。

執拗に部屋の入室を断る妹で、調べて解ったことだ。

侵入しようと思えば出来る。

だが、目を付けられると厄介だ。

それに、ジャッジメント風紀委員の兄が不法侵入などしたら妹に迷惑が掛かる。

常盤台中学学生寮208号室に住んでいる所まで掴んだのだが、諦めた。

●
能力を使えば侵入は簡単だがそれはそれでバレた時の反動が大きくなるだけである。

高校入学で上条当麻に出会った。

俺はコイツを知っている。

そりゃそうさ。

なんたつて” 視て” きたからな。
フラグメーカーで不幸体質。
説教殴りやろうで大体あつてゐる。

イマジンプレイヤー
幻想殺しの持ち主

右手一本で全てを解決。お困りの方はツンツン頭の高校生にお声を
おかけください。
きつと何とかしてくれます。
そげぶで。

何故この高校に入ったかは常盤台中学が近いからである。
レベル4はこの学校の最高レベルらしい。

小萌先生が言つてたから間違いない。

それにしても小萌先生をリアルで見るとアレだ。

保護欲が湧くというか、心の奥底から湧き出る何かがある。
持ち上げたこともある。

涙目で怒られた。

青髪ピスはかなり羨ましそうに悶えていた。

アレは人間として手遅れの部類に入る。

あらゆる女性を迎え入れる包容力の能力者だ。
たぶん。

『ボクあレッド君でもレッドちゃんでも受け入れるんよ?』

レッドは俺のあだ名である。紅太の紅の部分を英語にしたあだ名で
高校入学して一週間で定着してしまった。

あの言葉を聞いた時はマジで殴った。ギャグ補正で死ななかったの
が悔やまれる。

俺は真正銘男だ。

顔立ちは妹の黒子に似てるが。

アイツの前では二度と女体化しないと誓った。

レベル4。

ボディコントローラー

身体操作の紹介は自己紹介の際に説明したが、実演したら青髪に告られたのだ。

初対面同士なのに。

いやー、あの時のクラスの引き具合は思い出してもゾツとする。

俺に対してではなく青髪に対して引いた。

しかし、俺の能力でいじられる事がなく、むしろ保護されるようになったのはある意味青髪の功績である。

瘦躯気味であるが、こう見えても握力とか測定器を壊せるんだぜ。

体力測定で世界新記録とか言うレベルじゃない異次元の結果を出してしまった。

冗談みたいな数値で体育教師が困っていたが仕方のない事だ。

だって、能力使用OKというか使えて強制されたからやった。今は反省している。

ボディコントローラー

『身体操作って便利だにやー。女湯に入れるにやー』

土御門元春はシスコン軍曹だ。とにかくシスコン。

『レッドにも妹が?! それは義か? 実か?』

マジな顔でマジな口調だった。質問の内容はアホだった。

●

上条当麻の一級フラグ建築士には制裁を。

『ねえ、当麻あ。私、可愛い?』

『えーと、紅太は男! 男なんだよ男なんです三段活用! 頼むから女体化で俺を惑わさないでー! 色々反応しちゃう! だって俺、

男の子だもん！』

ボディコントロール
身体操作で巨乳、黒髪ロン毛の美女へ変化して、声帯をいじって声を色っぽく調整。そして、話しかければまんまと乗ってきた上条当麻。

葛藤していたが、視線は谷間に行っていた。

それ以来、女体化して上条当麻に対して性的ないたずらをするのが楽しくてしょうが無い。

セクシャルハラスメントである。

ん？

フラグなんて立ってねーよ。

いじり甲斐のある相手であるだけだ。

●

主人公

白井紅太

レベル：大能力者（レベル4）

ボディコントロール
能力：「身体操作」

● 肉体が変化する時、上条当麻は反応する——！！

プロローグ（後書き）

なんか始まった。レールガンの方メインです。

第一章 白井兄妹（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

第一章 白井兄妹

●

白井黒子は焦っていた。

それは風紀委員としての活動ではなく、家族である兄に対してである。
ジャッジメント

自身の中学入学、兄の高校入学から3ヶ月近く顔を合わせていない。コレまでの人生で兄と顔を合わせていない期間としては最長期間である。

ジャッジメント
風紀委員で忙しいと言って合わなかった。

実際は違うのだ。

姉と慕う人物で忙しい。

しかし、兄には紹介もしていないし、これからも紹介するべきではない。

兄は私の事をかなり好いていると思う。

それは女性としてなのか、妹としてなのかは不明だが、兄が可愛い女の子好きなのは確実である。

それに、自分自身が崇拜していると言っても過言でもない相手があり、それを兄が見逃すわけもないのだ。

最悪、私とお姉様のどちらが好き？ と聞いてやろうか。

●

強者に目がないお姉様が私の兄に突っかかるに違いない。
レベル4とレベル5。

差はある。

しかし、自分の失態だ。

『黒子は兄妹とかいるの？ 私、一人っ子でさー』

『一人、不肖の兄がいますわ』

それに対して、

『へえー、お兄ちゃんかー。いいなあ。で？』

『で？』

実力は、

『不肖のと申しましたが、性格的な問題ですの。強さでいったら、私なんぞ足元にも及びませんわね』

ついつい、口を滑らせてしまった。

『黒子、風紀委員ジャッジメントなの？ お兄さんって風紀委員ジャッジメントなの？』

『いえ、ただの高校生ですの。でも、そうですね。体術、護身術などの多くの事を教えて下さいました。もちろん、私に傷がつかないように手加減ありでしたけど。それでも私の全力をぶつけても歯が立たない憎たらしい相手ですわ』

誇らしいと思わないが、兄の事では舌が回る。

『レベルで追いついたのにお兄様には勝てませんですの。まあ、こちらの手札を知っているという面もありますけど、まだ一度も勝った事ありませんわね』

『ふーん。お兄さん強いんだあー。いいなあ。そういうの』

憧れ、ですか。

でも、目の上のたんこぶ。というか、幾ら努力して、血反吐を吐く

ような訓練をしても勝てない相手というのは腹ただしいものですよ？

そういった話をお姉様にしたのが失態だった。

写真を見せるだの。一度合わせてだの。

ぶつちやけ戦ってみたいとかやめて欲しい。

白井黒子の思いとは裏腹に出会って欲しくない両名の邂逅は無常にも必須であつた。

●

暴漢達に囲まれていた少女。

その制服は常盤台中学の物である。

通りゆく人々は横目に、それでも良識のある人物は風紀委員ジャッジメントに連絡した。

だが、風紀委員ジャッジメントが到着する間もなく少女は救われる。

少女を囲んでいた暴漢達は現れた邪魔者に文句を垂れながら人気のない裏路地に移動したのだ。

少女はその面影に一瞬目を奪われた。

自分の知っている人に似ている。

次の瞬間には自分を囲んでいた暴漢達が倒れていた。

似ている人物を思い出そうと気を逸した一瞬の出来事である。

「は？」

ジャッジメント

「風紀委員ですの！　　ってお姉様！　　そいつから離れて下さいですの！」

御坂美琴の視線の先。

倒れる暴漢達の中中心にいる人物とその先の奥にいる白井黒子の顔を見比べて理解した。

似ている兄妹だ。

間違っことのない顔の作りをしている。家族だなあ。それにしても黒子ったら兄をそいつ呼ばわりとは。

「……。通報にあつた路地裏に連れていかれた女性というのは誤報でしたのね」

「黒ちゃん！ 超久しぶり！ 元気してたよね？！ む？ 身長は数センチ伸びたね！」

黒子。お兄さんに黒ちゃんって呼ばれているんだ。

「お、お姉様、これは……って。のわああ」

消えた。お兄さんの方が。

いや、移動だ。

黒子に抱きついていたのだ。

後ろから抱きかかえるようにスキンシップしていた。

テレポーター
空間移動能力者？ 兄妹揃って同じ能力？

その認識を変えるものがある。

彼が居た足元。

コンクリートの地面に靴跡が刻まれていたのだ。

パラリと路地裏を作っている壁から破片が落ちた。

視線を合わせるとソコにも靴跡があつた。

つまりは、壁を使った高速の立体移動だ。

靴跡を追うと彼の居た足場、壁の側面、黒子の真後ろの壁に刻まれていて、それが移動の経路であると予測できた。

「ああ、黒ちゃん、黒ちゃん。可愛いねよー。よしよし」

「ち、ちよつと！ お兄様！ いい加減に、しろ！」

あ、切れた。

兄の姿が消えて、地面に叩きつけられる。
はずであったが、リバウンドだ。

ボールが地面に跳ねるようにお兄さんは跳ねた。
その上で、

「なんと破廉恥な下着！」

「こおんのおお！」

妹のパンツを叱咤する兄がいた。それを叱咤する妹もいた。
なんか新鮮な黒子の反応を見ているなあ。

●

「いつも妹がお世話になっています。御坂美琴さん」

「いえ、そんな事は……」

ファミレスだ。

黒子の仕事の処理が終わり、手近なファミレスで紹介された。

白井黒子の兄、白井紅太。

レベル4の身体操作である。
ボディコントロール

肉体強化から容姿まで変えられるという能力であり、その力の片鱗
は先程見た。

高校1年生で、レベル1から努力でレベル4にまでレベルアップし
たらしい。

自身と同じであり、親近感が湧く。

さつきみた光景が嘘のような礼儀正しい好青年。

それが御坂美琴が感じた印象である。

席は白井兄妹が正面におりその正面に私がいる。

顔を並べると本当に似ている。

高校の制服を来ていなければ姉妹と間違えそうだと思っるのは失礼だ

ろうか。

「ところで、あの時どうやったんですか？」

それは私を囲んだ暴漢達の始末の仕方。

「ん？ ああ、あれね。顎先をちよつとね。こう、当てて、脳震盪」

黒子の顎の先を兄である紅太さんの拳の先がゆつくりと少し掠める。あの一瞬で、5人を相手にそれをしたと言う。

「お兄様の最高スピードは肉眼では認識不可能なレベルですの。録画されたテープをコマ送りにしても腕が消えて見える程のスピード。相変わらず、でたらめですの。それが、ボディコントローラー身体操作の一端というのですから反則ですわ」

「へえ」

感心。

黒子が男を褒めるなど初めて見た。

認めているのだろう。兄の事を。

いいなあ。私も兄妹欲しかったなあ。

「あ、きたきた」

それはパフェであり、ケーキであり、とにかく甘いものであった。三人前はある。

それが全て紅太さんの注文したものであった。

「全く、お兄様の甘いもの好きも相変わらずですの」「いやさー。能力的にカロリー消費がね」

それは、

「羨ましい。身体操作ボディコントロールって考えてみたら女の敵ね。太らないし、思い通りの体型になれるし、顔も思い通りって何よ！ その羨ましい能力！」

素の自分が出てしまう、女性の羨む能力であつた。

●

羨むものは嫉妬。

欲するものは理想。

配点：（女の敵）

●

第一章 白井兄妹（後書き）

マンガとアニメを都合のいい様に話の軸に。

第二章 身体操作の兄（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

第二章 身体操作の兄

●

レベル測定。

常盤台中学はお嬢様学校である。

在学条件の一つにレベル3以上である事が含まれているとんでもない学校だ。

白井黒子は自分のレベルが変わらずレベル4であることに少なからず落胆した。

精度は上がっている。記録も伸びている。それでも到底敵わない兄。

そぐわない。兄がレベル4であることだ。
ジャッジメント

風紀委員に入り幾つかの事件を解決した。

相手の実力や能力の解析は出来る。

ならばこそ、兄の実力がおかしい。

同じレベル4でも相性や実力があり個々で変化する。

本当の実力を隠している可能性。

ないとは言い切れない。兄の手札は多い。

まだまだ隠している手札があるのは分かっている。

己が知る兄の能力は、その身体が消える程の高速移動術と容姿を変える変態性、それに軟体生物並の柔軟性。

腕。30メートルは伸ばせるのを見たことがある。

容姿を変える。最後に見たのは小5。

一緒にお風呂に入るのが恥ずかしくなり、それを言ったら身体が女の子になっていた。

それでも中身を知っているのですその後の一緒にお風呂は断るようになった。

高速移動の数値は秒速83・3メートルらしい。時速300キロで

ある。新幹線かとツツコんだ覚えがある。
高速移動は当時の数値で、今はどうなっているかわからない。

●

初春飾利と佐天涙子がいる。
約束があつた。

レベル5に会う。

常盤台中学のエース、御坂美琴に会える。

白井黒子の紹介だった。
だが、道中に遭遇した。

「あれ？ 紅太さん？」

「お、初春か、久しぶりだな。元氣そうだな。そっちの娘は初めましてだね。白井紅太だ。よろしく」

白井黒子の兄である白井紅太と初春飾利は知り合いである。

ジャッジメント

風紀委員に入る前に知り合い、友人となつた白井黒子。

その白井黒子に似ている兄が現れたのはいつだったか忘れてしまった。

何故なら気付けば白井黒子のそばに居たからだ。

レベル4。しかし、白井黒子が敵わないという。

学園都市のデータベース上でもレベル4。

ジャッジメント

一般人だ。だが、初春飾利は彼に風紀委員に入って欲しかった。

それは今も変わりはない。

「あ、初春のクラスメイトの佐天涙子です」

「はい、よろしく。佐天さん」

別に呼び捨てでいいですよー、と佐天涙子が言っているのを見る。

思い出す。私の時も初めはさん付けだったなあ。

「所で、君。本当に初春と同年？」

それは私と佐天さんを見比べて紅太さんが問うた。

あー、そうですねーだ。色々佐太さんは発育がいいですからね。

「えっと、そうですね。初春とはどういった関係ですか？ 白井ってもしかして……」

「そう、初春の友人の兄。白井黒子の兄だ。これから黒ちゃんの所に行くけど、そっちもそう？」

「そうですね。もしかしてついに紅太さんも風紀委員^{ジャッジメント}入りを決意されたんですね」

兄妹揃えば心強い。
だが、

「まーた初春は言ってるな」

「兄妹揃ってレベル4なんですから、兄妹揃って風紀委員^{ジャッジメント}でもおかしくないですよ！」

断られるのは分かっている。

「へー、お兄さんレベル4なんですかー。すごいなあ。私なんてレベル0ですよ」

●

佐天涙子は好感を持った。

レベルが高い能力者は総じてレベルの低い相手を小馬鹿にする節が

ある。

だが、眼の前の相手はそうではなかった。

「そうか。頑張ってレベルアップしようね。俺は初めレベル1だったから努力次第では上、目指せるよ」

道中、講義を受ける事になった。

「自分だけの現実という基板がある。その上で自己を確立する事が大事だよ。それはね、自分を信じる力。初めからレベル0だからと言って諦めずに究極な自己中で、自分こそ最高、最強って暗示でもいい」

「それが、レベルアップの秘訣ですか……」

紅太さんの場合は、そうなるらしい。

だが、結果としてレベル4だ。

学校で教わるよりも現実的でわかりやすいと思う。

「いきなり50キロ走れって言われても無理だよな。ならまずは500メートルから走りだして、次は1キロ、その次は10キロって感じで段階的に訓練すれば……」

地道な訓練と鍛錬。

それがレベルアップに必要な事である。

湧き上がる感情。それは、尊敬だ。

親しみのある人だ。

その妹さんに興味が湧く。

だが、見た。

ファミレスで女の子同士が重なりあっている所を。

その二人が、白井黒子と御坂美琴であった。

御坂美琴さんも白井紅太さんも同じく良い人である。
価値観の変わる日だ。

お嬢様と思っていた相手はゲーセン行こうと言だし。
尊敬できる人の妹はアレだった。

●

人集り。クレープ屋は流行っていた。

最後のゲコ太ストリップを貰ったのは白井紅太であった。

女の子相手におごるといふのは男の使命らしい。

振り向けば膝から崩れて犬のような格好で落ち込んでいる御坂美琴
がいた。

いい形の尻だ。

「ストリップ、いる？」

「え？」

子供らしい趣味を持っていた。わかっていたがまるでゲコ太中毒だ
な。

「ありがとうございます」

三人のお礼と、

「ま、お兄様ですから、妹に貢ぐのは当たり前ですの」

一人の感謝であった。

それぞれのクレープは口を付けられていた。

「黒ちゃんのちよつと一口頂戴」

了解を得ずに食べる。

「ちよつとお兄様。つまみ食いですわよ」

慣れた反応。その代わりに俺のも一口食われた。

「初春のはどんな味かな」

「え？ あ、ちよつと」

初々しい反応。その代わりに俺のを差し出す。

「い、頂きます！」

一口食べられた。

「涙子のは、どんな味かなあ」

「あ、どうぞー」

微妙な反応。それでも、顔が赤かった。
その代わりに俺のを差し出す。

「あ、こつちも美味しいですね」

一口食べられた。

「美琴のはーつと」

「あ、ちよ、ちよつと待ったー！」

過敏な反応。だが、食う。

「はい」

差し出す。

「う、ううう」

唸りながらも食べた。顔が真っ赤である。

可愛い。黒子も同じ様に差し出したり美琴のを食べようとしていたが、防がれていた。

全員呼び捨てで良いらしい。そりゃ、年上だからな。そろそろか。

●

異変に気付いたのは初春飾利だ。

それは昼の銀行のシャッターが閉じているというだけの異変である。

「アレ？ あそこの銀行、昼間から何で防犯シャッター閉まってるんだろう？」

それを聞いた全員の視線が集まった瞬間。

轟音。

爆破音が響いた。

素早く反応したのは風紀委員の白井黒子と初春飾利であつた。
ジャッジメント

「初春！ アンチスキル 警備員への連絡と怪我人の有無を確認。急いでくださいな」

「は、はい！」

「黒子！」

御坂美琴が叫ぶが、

「お姉様と、お兄様は待機！ 学園都市の治安維持は私達、ジャッジメ風紀委員のお仕事！ 御行儀よくお待ちくださいな」

俺まで釘を刺された。

「黒ちゃん。行っておいで。危なくなったら——」
「それには及びませんわ」

●

三人の視線の向こう。白井黒子と銀行強盗がいる。
初春飾利は一般人の対処をしている。
取り残されて、待機を下された二人と無力な一人。

「腕を上げたなあ」

一人の銀行強盗は宙返りをして投げられ背中から地面に強打された。

「すごい」

「さすが、黒子ね」

佐天涙子と御坂美琴の感想である。
パイロキネシスト発火能力者か。あの程度なら楽勝だ。
心配事はあったが、杞憂だったか。

「男の子が一人足りないんです！」

それは初春飾利の相手の叫び声である。
忘れ物を取りにバスへ向かった少年がいない。

「初春飾利はココを頼む。涙子と美琴と俺でその子を探すぞ」

「はい」

「わかったわ、手分けして探しましょう」

美琴は一人。涙子は俺とペアで探す。

手短に、三人で分散して探したほうがよかったが、涙子は身を守る術がない。

という理由でペアになったのだ。
変化はあった。

それは犯人の一人が人質を取れずに一人で俺達に向かって車で轢き殺そうとしてきた事だ。

人質になるはずの少年はいち早く俺と涙子が確保した。

その隙に犯人の一人は車に向い、何を思ったかこちらに猛スピードで向かってきたのだ。

殺意のある車に涙子が動けず、また、守るように抱きしめた少年も動けなかった。

目の端で御坂美琴がレールガンを撃つ構えを見せたが、その射線上に俺達がいた事で撃てずにいた。

ならば、俺が前にでる。

「こ、紅太さん！」

誰かの悲鳴に近い叫び声があった。

激突する。誰もがそう思った。

だが、直前に、男の右手が振り上がり、

ボディコンテローラー

「身体操作、私の最強のお兄様ですの」

轟音。

そして、振り下ろされた右腕は車のフロント部分を大破させた。スピードの勢いで車体の後ろ側が持ち上がり、男の頭上を超えて回転する。

車体の背の部分から地面に落ち停止する。

その先に立つ男は無傷であった。

「ま、こんなもんだ」

佐天涙子の顔には驚愕の表情があり、それは取り巻きの見物人達も同じであった。

「す、すごい……」

●

子供を守った佐天涙子はお礼をもらっていた。

気恥ずかしいものだ。

それでも、嬉しいと思う。

レベル5の御坂美琴にも格好よかったと言われたし、白井紅太にもお礼と賛辞を貰った。

『身を呈して誰かを守るって事はなかなかできないことだよ。その事は能力の有無じゃなくて、人間として強いって思うよ。俺は』

正直、かなり嬉しかった。

御坂さんは見せ場を取られたと悔しがっていたが、それでもその目は獲物を見つけたような目だった。

黒子さんは怒っていた。

その相手は兄であって、そのやり取りは羨ましいものであった。

●

憧れと尊敬

その先に生まれるモノは何か

配点：（恋心）

●

第二章 身体操作の兄（後書き）

ルビが上手くいかない。とあるの独特の用語は困るぜ

第三章 主人公と兄（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

第三章 主人公と兄

●

「当麻くん」

「げ、レッドさんじゃないですか」

とある日の事。

上条当麻の部屋には白井紅太が遊びに来ていた。

それも、女の格好で女体化している容姿で、誰もが振り向くような美女だ。

白井紅太の普段の髪の色は茶色であるが、今日は黒髪のロングであった。

上条当麻の反応を精査した結果。黒髪ロングのお姉さん系巨乳が弱いとわかった。

ならば、弱点属性で遊ぼうではないか。

胸元は開き、谷間が見える服に、短めのスカート。その下にはちゃんと女物の下着を穿いており、どう見ても女である。

それこそ街を歩けば誰もが振り向くような容姿であり、その娘を隣に歩けば嫉妬されるのは必須であった。

「あの、視線が怖いのは私の勘違いでしょうか？」

部屋から飛び出して街で買い物をする。

上条当麻の左腕には柔らかい刺激と良い匂いのする塊が当たっていた。

周りの男。羨ましい。けしからん。死ね。

その視線の先の上条当麻の心境は複雑であった。

こいつは男、コイツは男。

男だー！

はは、羨ましいか！ その羨ましそうな目で見ている奴！

中身は性悪な男だぞ！ でもな、オパ―イの感触とか、肉々しい体つきとか女の子そのものなんだぜ。

良い匂いするのは香水か。手が込んでいる。

いやいや、冷静になれ。上条当麻！

こいつは男なんだ。

ほら、女の子同士で仲がいいと手を繋いだり腕を組んで歩いたりするだろ。

今の状況はそれだ。

不幸の根源の右手。

女の子にモテたりしないし、あらゆる不幸が付いてまわるが、今の姿はどうだ？

客観的に見ればそれはカップルという言葉が当てはまるだろう。

青春してる。勝ち組だと高らかに誇れる。

そう、相手が本当に女の子だったらな。

いや、見た目は完璧な女の子だ。

だから、街を歩いている際の男からの嫉妬の視線が。

女の子達はなんであんな冴えない男にあんなキレイな女の子がという疑問の視線が振りかかるのだ。

かくいう今も、

「はい、あーん」

とクレープ屋で彼女が購入したクレープを差し出されており、その周りの人、特に男性からの視線は強くなる一方である。

客商売であるクレープ屋の兄ちゃんでも一瞬こいつに見とれたのを

見逃さなかった。

「あの、レッドさん？」

紅太はよく人の食べ物を欲しがる。

いるだろ？ それ一口ちよーだいつて言う奴。それだ。

あーんの前に、俺のクレープを一口食べた。その後、これだ。

あーんである。

乗るか反るか。

「なあに？ ”いつもみたい”に、口移しじゃないと嫌？」

ざわつと、周囲がざわついた気がした。

気のせいだ。気のせいにしてください。

不幸だー！

●

精神的に消耗した。

憧れの女の子からのあーんがアレほどの破壊力と羞恥心と精神力を使うとは思ひもなかった。

クレープの先。谷間とか見えるし、その顔は美人である。

だが、男だ。もう男でも……。いや、ダメダメ。その一線を超えちゃあ駄目！

不幸にも、周りから見れば幸福にしか見えない状況だったと思う。

街に出て僅か2時間。あつという間に過ぎ去る。

それは楽しいからだ。

もちろん、恋人同士のデート的なものではなく、友人同士の交流という意味である。

不幸体質を理解している友人はそれを最小限にする。

つまり、金銭は彼が持ち、食事の持ち運びや、道端のトラップに気を配り事前に知らせてくれるのである。
端から見ると亭主関白の男に従う女の姿であるが、それはいつもの事である。

鳥の糞が飛んでくれば、引き寄せてくれて回避。

バナナの皮が地面に転がっていれば彼が拾ってゴミ箱へ。

先ほどのクレープも彼が購入して彼が持ち運び、あーんされた。

あの発言は嘘だ。いつもみたいにという発言だ。

周りの反応と俺の反応を楽しんでいただけである。

それが、性悪の証なのだ。

だが、その性悪を打ち消す行為が俺のサポートのような動きである。

正直、有り難い。

本当、女の子だったら是非お付き合いを申し込みたい。

いや、むしろその先、いやいや、結婚を前提に。いやいやいや、諦める。こいつは男だ。

そして本当の地獄はここからだった。

セブンスミスト店内の一箇所。

女性物の下着を扱うランジェリーショップである。

そこにそぐわない人物。

男である上条当麻がいた。

当然、男である上条当麻は居心地が悪い。

だが、更衣室の中。

時折カーテンを開けて見せてくる。

「おわー！ 見えてるから！ 丸見えですよ！ レッドさん！」

ブラと下着のみの格好を見た。それは艶かしく、思春期の男子高校生には刺激の強いものである。
それを気にすることもなく、

「やつぱ当麻はこっちのブラがいいかな？」

その場でブラを取り外し、双山の頂と突起物まで丸見えのままに付け替える。

「ぶふああああ、見ちゃいましたよ。目視しちゃいましたよ。刮目しちゃいましたよ！」

「何やってんのよ！ アンタは！」

それはそうだ。

女性物下着の店でココは更衣室前だ。その先のカーテンは開かれており、中にはブラとパンツのみの女性がいる。

客観的に考えるなら俺がカーテンを開けて覗いたとも取れる。変質者である。それを咎めるビリビリ中学生は正しいと思う。

「ビリビリ中学生か、お前にはまだ早いだろ！ アレこそがお似合いという言葉にぴったりの人物ですよ」

指差す先は更衣室内である。

「こおんの、ド変態がああ！」

●

「所で当麻くん。この女、誰？ 浮気？」

さすがに御坂美琴も店内で暴れる事無く、上条当麻に対して腹部への打撃。

その後、バックドロップという荒業で事済んだ。

しかし、ランジェリーショップの横の通路で修羅場が生まれ始めていた。

「え？ いや、知り合いと言つか、付け狙われているというか」

「ストーカーねえ。まだ中学生じゃない」

「なんですつてえ！」

店内に響く程の声をあげる御坂美琴だったが、ココが公衆の面前であることを思い出して大人しくなる。

「と、とにかく。今こそ因縁の決着を……」

「ダメよ」

遮る様に言い放つ。

（当麻、話を合わせろ）

（り、了解であります）

小声で御坂美琴に聞こえない程度に上条当麻と会話した。

「なんでよ！ アンタには関係ないでしょ！？」

「あるわよ？ 私達、これから新しい下着を脱がす行為をしにホテルに行くんだから」

一瞬、御坂美琴が停止した。

だが、言葉の意味を知り、顔が真っ赤に染まる。

「な、なな何言ってるのよ」

「当然、ナニよ。ねえ、当麻くん。これから大人のお楽しみするんだからね？」

「そ、そうだ。残念だったな。ビリビリ中学生」

何故か上条当麻も顔が紅いが、

「じゃーねえ。さ、行きましょ」

上条当麻の腕を取ってその場を後にする。

その姿に御坂美琴は声を掛けられずいた。

他人の恋路を邪魔する程無粋でもなく、何よりこの後するであろうあの二人の行為を想像してしまい、戦うどころではなかったのだ。

とある日の上条当麻遊び

配点：（幸）

第三章 主人公と兄（後書き）

誤爆。

ホントは明日の昼更新分でした。

第四章 超電磁砲と兄（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

第四章 超電磁砲と兄

●

御坂美琴と白井紅太は相對する。

人氣のない川縁に佇む二人。

事の始まりは、御坂美琴のメールであつた。

『会いたいから来て』

それに釣られたのが白井紅太であつた。

御坂美琴の性格を知つた上で、勘違いした。

告白か！

いや、決闘の申し込みでした。

「さて、告白かと思つて来てみれば色氣のない決闘の申し込みとは
ね」

「いやいや、紅太さん。あつて間もないですから告白とかないですよ」

決闘はありなのかよと突つ込みたい。

「んで？ 黒ちゃんには内緒で呼び出してまで何でよ？」

「ま、黒子も貴方の事疑つてた見たいだし、レベル4の割にはどうも強過ぎるって」

「それは黒ちゃんの勘違いだね」

黒子の手札を知り尽くしているからな。

「それでも、強いんでしょ？ 私、強い人に興味あるのよねえ」

ちよつとエロく聞こえた。

遅かれ早かれ戦う事になっていたんだろうな。

自制のないエロ女め。

「なら俺は弱いから、むしろ降伏ということで決着つけね？」

「はっ！ 馬鹿いつてんじゃないわよ」

バチツと帯電する音が聞こえる。

「ま、お嬢様には似つかわない言葉遣いだな。いいよ。遊んであげるからかかってきなさい」

「なあんですつてええ！」

バチバチツと帯電する。感情の読みやすい相手だ。

御坂美琴の前髪から角のように青白い火花が散る。

それは槍の雷で一直線で襲いかかってきた。

迸る青白い電撃の槍の先。

御坂美琴は確かに当たったと確信したのだ。

●

爆破音に砂塵。

地面が抉れて砂が舞う。

御坂美琴は驚愕するのだ。

背後に感じる。

「何をやったのよ？」

「聞くバカがいるのかよ。それに答えるバカもいるわけないだろ」

言われて戦闘中だったと思います。
振り向いて無傷の相手を確認した。
やっぱりとんでもないとこだわ。

学園都市で私と戦える相手なんてアイツ以外にいたとは思わなかった。

記憶を探る。以前見た高速移動だろう。

だが、光の速さで落ちる雷を目で見て避ける事が出来るのだろうか？
私の攻撃は落雷と同じスピードだ。

「考えながらも手を休めちゃあいけないよ？ 美琴ちゃん」

それは黒子に対するように兄が妹に説くような口調であった。

「ナメんじゃないわよ！」

自身を中心に360度範囲に放電する。

今度は当たったのを目視で確認したのだ。
しかし、

「なんていうか、勿体無いな」

「！ どうして？！ 確かに当たったはずよ！」

無傷であった。

そして右腕が振り上げれて、

「人間の限界を超えた一撃って見たことある？」

解答の前に私の足元に振り下ろされる。

轟音と震撃。

「え、あ、あ？　嘘？」

士だ。

尻餅について周囲を確認して理解する。

それは、隕石が落ちた後にできるクレーターである。

直径5メートル。深さ1メートル弱。

刻まれた痕跡は私と彼を地面の下に移動させるものであった。

●

種明かしをしよう。そう前置きをされた。

私達はあの場所から逃げた。

彼の一撃で学園都市では珍しい予測されない地震が起きたせいだ。

決闘場所から離れたファミレス。そこで夕飯を食べながらのことである。

ボディコントローラー

「絶縁体で防がれたわけね。身体操作ってそんな事もできるわけ？」

「黒ちゃんには内緒ね」

しかし、よく食べるなあ。三人前は食事をとっている紅太を見て呆れる。

どうも、能力の代償が使うと腹が減るらしい。

う、羨ましい。どれだけ食べても太らない。むしろ能力を使用すればカロリーを消費するという。

「でも、まあ、最後の一撃はなによ？　アレ、手榴弾以上の破壊力じゃない？」

「さあ？　測ったことないからわかんね」

「はあ？」

測定テストがあるはずだ。

高速移動と容姿の変態。それに怪力。

大能力者のレベル4とは軍隊において戦術的価値を得られる力が必要である。

その事を彼の説明で理解はできる。

「つまりは、高速移動で戦況をかき回したり、変態で仲間に分れ込んで暴れたり怪力で色々殴り倒したりという戦術的価値が認められたということだな」

事前に敵対する軍の司令の容姿がわかっていればそれに容姿を変えて味方に有利な戦況を作り出せる。

潜入と謀略が学園都市にレベル4として認められた価値だということだ。

だからこそ疑問に思うのは彼のレベルは正しいものではない。だが、その答えは単純であった。

「全力で戦えるのって30分が限度なんだよね。それを超えると栄養失調になって倒れる」

1人1秒で倒せるとして、1800人以上の軍隊を組めば彼は倒れる。

確実性を増すのなら3000人〜5000人で編成された軍隊を用意すればいい。

そうやって己自身を評価する。

「代償ね。私も使いすぎると電池切れで動けなくなるし」

納得出来無い事も多い。

されど、目の前の幸せそうな食事を取る光景は見ている私までも幸福にさせるのだ。

●

「あ？ お、お兄様とお姉様？」

それは偶然である。

ファミレスから常盤台中学の寮までの道のりで、白井黒子の先に見慣れた二人の姿があった。

「落ち着きなさい。白井黒子。あれは、きっと偶然道でお姉様に会ったお兄様が夜道を送るという名目で私に会いに寮付近まで来るというシスコン行為なはずですよ」

それでも焦燥感が湧き上がる。

兄か、御坂美琴か。

二人が男女の仲になり、結婚したら正式なお姉様の義理妹になれるのだ。

だが、それを良しと思えない。

話が飛躍し過ぎていますわね。

たかだか二人が偶然帰り道が同じになっているだけである。

ならば、今は二人の仲を進展させるのではなく、邪魔をする。

「おー、黒ちゃんだ」

抱きついた先はお姉様だった。

「いきなり抱きつくんじゃないわよ」

「ぐえっ」

首根っこを掴まれた。体重は重くない。だが、女の子一人を軽々と片手で持ち上げる兄。

「さっきソコで偶然美琴に会ってね、ついでに今日の見納めに黒ちやんに会いに行く所だったんだ」

ホツと心の焦燥感が消える。

やはり予測は正しかった。

そして、抱擁された。

「んー、これだ」

「ち、ちよつとお、お兄様！」

それはいつもの行為である。

狭い腕の中、膝打を決めようとしたが、

「はは、じゃーねー」

私とお姉様の後ろ5メートル程の所におり、手を振っていた。

「嵐のような人ね。まあ、良い人じゃない。妹思いの」

「それをシスコンっていうのですよ。お姉様」

●

超電磁砲と身体操作。

果たしてどちらが強いのか

配点：（勝負）

•

第四章 超電磁砲と兄（後書き）

熟読せずにサッと読んで楽しむことをお勧めします

第五章 無能力少女と兄（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

第五章 無能力少女と兄

●

ファミレスだ。

学生対象にしているため商品の値段は安くてフリードリンクも豊富であり、料理も美味しいのだ。

初春飾利と佐天涙子の正面には白井紅太が座っていた。

それは白井紅太が割引券を持っていたので、それに便乗する形で二人は昼食を頂いたのだ。

偶然ではなく、二人の内一人。初春飾利が白井紅太の行動を監視力メラで追い、偶然を装ってばったり出会ってしまったという演出をした。

目的は勧誘である。

一方、佐天涙子は風紀委員ジャッジメントに遊びに来ていた。

友人の黒い部分を垣間見たのだが、彼に会えるならいいかという理由で初春飾利に付いていったのだ。

「結局、いつになったら風紀委員ジャッジメントに入ってくれるんですか？」
「やだよ」

佐天涙子は何度目かのやり取りにため息をつく。

意外に初春ってしつこいなあ。

「ところで涙子達の学校生活はどう？ 楽しい？」

あ、無視した。

初春とのやり取りの間も話しかけてくれるので、嬉しいのだが逃げて道に使われている気がする。

「え、ええ。まあ、まだまだレベル0ですけど。目標は目指せレベル1です」

アレ以来、地道に能力開発をしている。

その熱心さが教師に伝わったのか、褒められた。

『佐天さん。熱心でよろしい。心境の変化ですかね。いい？ あなた達の年齢は心と身体の成長期です。考え方が変われば一気に伸びる子もいますよ』

「それで良い。それと初春。ジャッジメント風紀委員には入らん。俺より美琴に声をかけてみればどうだ？」

初春の目が輝いていた。

あちゃー。御坂さん。頑張れ。

●

佐天涙子はいつい先程の事を思い出す。

ファミレスを後にした際に初春飾利はジャッジメント風紀委員からの呼び出しで不在になった。

本当はこのあと三人でセブンスミストでウィンドウショッピングをする予定であった。

それが二人きりのデートのようなモノになるとは思いもしなかったのだ。

紅太さんとは出会ってまだ間もないし、これも数度目の邂逅である。二人きりとなると初めてのことである。若干の緊張と期待と興奮が織り交ざる。

「さ、行こうかー」

衝撃が走る。

心の準備も無いまま手を握られた。

「え？ あ、はい」

その態度は慣れたものであり、容易に予測ができる。
妹の黒子さんとこんな感じなんだろうなあと。
それでも、嬉しいと思う。それにドキドキする。

「あ、あのー、慣れてますね。こういうの……」

自分でも驚く。口が滑った。人生初の自分の意思とは関係なく口が動いたのだ。

「ん？ ああ、手か。黒ちゃんといつのも感じだった。嫌なら放すよ」

手から力が抜けるのがわかる。

それを放してしまうことは相手の心を放してしまいそうであり、焦燥感が奔る。

だがら、思わず握る。自分から。

「い、いえ。ちょっとびっくりしただけです。是非このままで、お願いします！」

●

驚くことに、洋服や下着に詳しかった。

それは女性物である。選ぶのは男性である。
複雑な感情を持ったのは佐天涙子であった。

まあ、黒子さんの付き合いとかで詳しくなつたと。

それでも、自分のバストサイズにぴったりのブラを出された時は驚いたと共に若干引いた。

ならば仕返しとばかりに女性物の洋服を私が選び渡して見るとなんの抵抗もなく、更衣室で着替えたのだ。

「うわー、かわいいです」

顔立ちが黒子さんに似ているとは思っていたが、女の子の格好をすると黒子さんの姉に見える。

それより、なんで女装になんの抵抗がないんですか？！

「黒ちゃんに良く着せ替え遊びさせられたからね」

●

次々に店内を回る。

時間を忘れるというのはこのことだろう。

気付いたら午後6時間際であった。

「まじーな。こりや警備員アンチスキルに見つかるとうるさいぞ」

「もうそんな時間ですか？！ ちょっとやばいかも」

それはバスの時間が終了してしまう事を示していた。

プレゼントされた服が荷物だ。それに歩いて帰るには遠い。

なによりスキルアウトが動き始める時間でもある。

「ああ、心配するなよ。送って行くから」
「え？ いいの？」

たった一日で随分と仲良くなったと思う。

言葉から敬語が消えたのは相手が必要ないと言ったからだ。

「ま、少し我慢しなよ？」

「うわっ！」

お姫様抱っこというやつだ。

「きゃー！」

次の瞬間には景色が高速に移り変わった。

自分の体重を気にする間もなく、文句を言う暇もなくただ驚いた。
車とか抜いてるんですけどー！！

うぎゃー。と、飛んだ。

交差点の信号機の上を飛び越えて着地。

衝撃もなく、速度も落ちなかった。

絶叫系の乗り物は苦手ではない。だが、これは叫ばずにはいられない。

「非常識ですー！」

●

ぐったりと言う言葉が今の自分にどれだけ似合うだろうかと思う。

だが、自分の部屋が見える所までの移動時間はわずか数分であった。

「楽しかったよー」

「最後のがなければ満点だった。いやー、あれはもう無しで」

ハハツと乾いた笑いで答えが来た。
そして、

「うんうん、じゃあまたな」

頭を撫でられた。

はあ、私は妹かなんかですか？

今日は紅太さんの事をよく知る日だった。

人をからかうのが好きな人だ。

女装が似合う人だ。

優しい人だ。

私の憧れる人だ。

そして、心を動かされる人だ。

「うん、じゃ、またね。紅太さん」

私の顔は赤いだろうか。

それでも言う。

「今日は楽しかったです。よかったらまた二人きりで遊んで下さい」
「おっけー」

俺、帰るわ。と短い言葉を残し、夕焼け空の中に飛んでいった。

●

親交と進展

少女が想うのは何か

配点：（満点）

●

第五章 無能力少女と兄（後書き）

本来、^{アンチスキル}警備員なのにスキルアウトになっていたのを修正。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3935z/>

とある白井黒子の兄

2011年12月17日10時47分発行